

## おわりに

記述による回答の部分が多いこのアンケートは、回答者にとって負担の多いものであったに違いない。それにもかかわらず、600通以上の回答を得たこと、そしてそれらが、当時の様子をありありと伝える、充実した内容のものであったことは、予測を超えるものであった。記述には、各時代の学生たちが東京女子大学の建学の精神をどのように感じていたか、何に感動し、何に熱中して日々を過ごしていたか、彼女たちの目に何が映り、心に何が残されたかなどが、生き生きと表われていた。集計のために繰り返し読むうちに、私たち自身リアルタイムで参加しているような、そのような気持ちにさせられた。歴史を知るとはこのような体験を通ることかもしれない。

記述による回答のいたる所に、新渡戸稲造や安井てつ、石原謙をはじめとする多くの教員について、そして職員についても、個々にまつわるエピソードが出現して、教職員と学生の関係が如何に近いものであったかが、自然に納得できた。特に安井てつの存在の大きさ、学生への影響力の強さが印象的であった。キリスト教主義が、学生の人格や思想の形成に、学内の落ち着いた勉強する雰囲気を作るのに、大きく役割を果たしていたこと、そして強制されることがなかったために、クリスチャンでない学生にもむしろ強く、影響を与えていたことも感じられた。さらに、時代の流れと共に東京女子大学もキリスト教色が薄れ、いわゆる学問や勉強の場としての色合いが強まった様子も、見る事ができた。

また、自由・個人尊重・人格尊重・平等・国際性など、学外の社会に吹いている風とは異なる風を身に受け、学生たちが新たな価値観を身につけていった様子が表れていた。安井の言う「サムシング」とは、それらを一言で言い表した言葉だったのではないだろうか。

無論、回答の全てが東京女子大学に対して肯定的評価をしているわけではない。本文にも、どのような批判的な回答があったかを紹介した。また、批判的な見方や意見の場合に回答を寄せない比率が高くなることは予測できる。このアンケートの結果を見る時に、われわれはそのことも忘れないようにしたい。

記述によって回答を求めた5項目は、その時代像を形作るモザイクのようになっている。それゆえ、記載された全てを付録として載せたかったが、分量のあまりの多さから不可能であることがわかり、巻末掲載は一部に留めざるを得なかった。しかし今後、東京女子大学の歴史と将来を考えようとする際の、貴重な参考資料にすることができるよう、全ての記述をプライバシーに十分に配慮しつつワープロで打ち直して、製本してある。大学の然るべきところで保存して欲しいと思っている。

2,000通にもおよぶアンケート用紙のセッティングや発送作業、回収されたデータのコンピュータ入力やワープロ打ちなどに、多くの学生たちの協力があつた。若い人たちの働きに感謝したい。彼女たちにとっても、祖母や曾祖母の年代の人々が自身と同じ年齢の時に、今も変わらぬこの緑濃く落ち着いた佇まいのキャンパスで何を考え、将来へのどんな

夢を描いたかを知る機会をもったことで、きっと何か感じるものがあったであろう。このようなことも、東京女子大学の歴史継承の役割を果して行く、とすることができるのではないだろうか。

なお、私たちはこのインタビューやアンケートを、この時代の後の卒業生たちにも続けたいと思っている。

## 参考文献

- 天野正子（編著）（1986）『女子高等教育の座標』垣内出版
- 落合恵美子（1994）『21世紀の家族へ（新版）』有斐閣
- 柏木恵子・小口菜採・若松素子（1997）『高学歴女性のキャリア・ディヴェロップメントに関する調査報告書Ⅱ』東京女子大学女性学研究所 Women's Studies 研究報告17
- 猿橋勝子・塩田庄兵衛（編著）（1985）『女性研究者—あゆみと展望—』ドメス出版
- 東京女子大学五十年史編纂委員会（1968）『東京女子大学五十年史』東京女子大学
- 東京女子大学80年誌編纂委員会（1998）『東京女子大学の80年』東京女子大学
- 『旅人われら』編集チーム（1998）『旅人われら—東京女子大学の卒業生たち—』東京女子大学
- 馬場房子（1996）『働く女性の心理学（第2版）』白桃書房
- フォーラム女性の生活と展望（編）（1994）『図表で見る女の現在』（シリーズく女・あすに生きる）②）ミネルヴァ書房
- 湯沢雍彦・古谷恵子（1996）『戦時女高師卒業者のライフコース—教育と戦争の影響を中心に—』財団法人地域社会研究所